参考資料４

長久手市障がい者自立支援協議会　就労支援モデル開発プロジェクト
令和６年度中間報告書

１　はじめに

国の調査（※）によると、心身の不調のほかに、就職活動でのつまづき、退職、職場になじめなかったことを、ひきこもり状態になったことの主な理由として挙げている人が少なくない。長久手市においても、日頃の相談支援や本市のオリジナル事業である個別訪問等調査から、障がいや不登校経験等さまざまな理由で就労につまづき、社会とのつながりが途切れ、その後にひきこもりや二次障がいになるケースが増えていることが分かっている。働きたくても、既存窓口への相談や居場所事業への参加は非常にハードルが高いと考えられ、支援機関による把握や早期支援が困難である。

ひきこもり状態が長期化し、社会的孤立、生活困窮等が深刻化してきた段階で、親亡きあとを心配する親からの相談やアウトリーチ事業でようやく支援機関が把握するが、その時点での生活状況の改善は非常に困難である。つまり、既存の相談窓口や居場所とは異なる、社会とつながる多様なきっかけの場、機会を創出していくことが必要であると考える。

（※）こども・若者の意識と生活に関する調査（令和４年度）

２　プロジェクト設置の経緯

近年、障がいのある人の相談窓口においても就労に関する相談が増えているが、障害者手帳の有無にかかわらず障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律上の障害福祉サービス（就労支援事業）の利用を希望しない人やなじまない人（以下、「働きづらさを抱える人」という。）が一定数いる。その大きな理由として、サービスの認知不足、障がい者を対象とするサービスへの抵抗感、障がいの自己理解不足などが考えられるが、一般就労も困難である場合が多い。しかしながら、福祉的なサービス以外の就労支援策が乏しく、働きづらさを抱える人の生活が何年も変わらない状況を目の当たりにする相談員の問題意識は大きくなった。

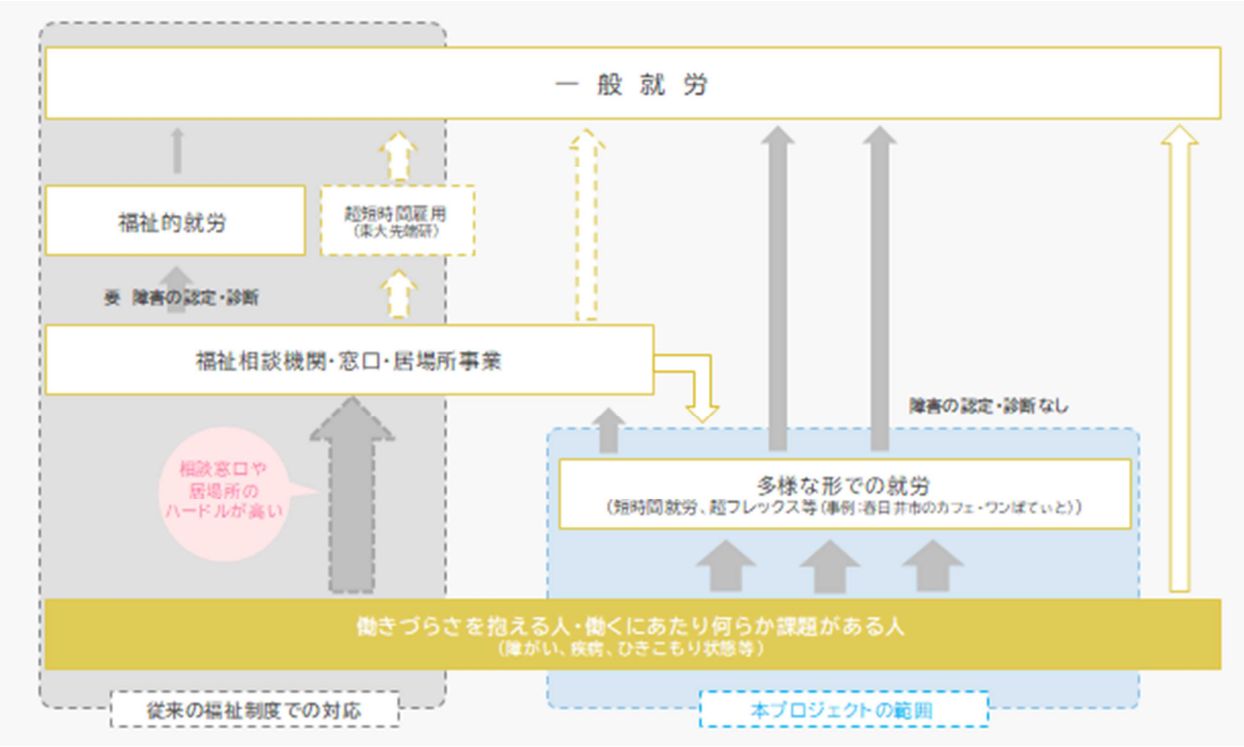
さらに、障がいのある人の相談窓口以外にも、コミュニティソーシャルワーカー（CSW）の「福祉なんでも相談」の窓口においても、働きづらさを抱える人からの相談が増え、同様の問題意識を持っていた。

そこで、本市では、まず、発達障がいの傾向や境界知能の中高生に向け、自身の得て不得手を知り、将来の職業・進路選択に活かす研修（就労コーディネート事業）を実施した。研修は、本人にとって働くことについて考えるよい機会となった一方で、実際に本人が「働いてみる」ことにはつながらなかった。

以上を踏まえ、既存の福祉の就労支援とな異なり、地域と協働し新たな就労支援モデルをつくり、働くことを通した社会参加のきっかけづくりを行うプロジェクトを立ち上げた。本プロジェクトでは、図１で示すとおり、従来の福祉制度とは異なる支援のモデルであることを重要なポイントとして位置付けている。

なお、対象となる働きづらさを抱える人は、障害者手帳を持っている人や障がいの傾向がある人だけではなく、過去の経験から対人不安やコミュニケーションに苦手さがある人、働くことに強い不安を持つ人など幅広く捉えることとした。

（図１）従来の福祉制度と本プロジェクトの就労支援の違い



３　令和６年度プロジェクトで取り組んだ内容

⑴　勉強会「働くことからの第一歩」

１５分からのフレックス雇用の実践者を迎え、そのノウハウや効果・成果について、本プロジェクトに関心を寄せてくださった事業者とともに学んだ。

・開催日：令和６年８月１９日（月）

・講師：小栗加奈氏（cafe&restaurant　ワンぽてぃと代表）

・参加事業者：３者

⑵　モデル事業

ア　内容

市内の３事業者に協力を得て、およそ２か月間、1 時間程度/日の短時間就労を実施（下表のとおり）

イ　モデル事業参加者（働きづらさを抱える人）

既存の相談窓口に繋がっている就労を希望する 10～20 代　３名

	事業者名	対象者	期間/総労働動時間	作業内容
1	風と虹	10 代	10 月～11 月 17 時間（原則２時間/日×８日間）	小物制作、洗い物
2	長久手アグサポ倶楽部	20 代	10 月～11 月 45 時間（原則２、３時間/日×週 2 回）	農作業
3	株式会社トビラ	20 代	１月～３月 8 時間（１時間/日×８日間）	事務作業、バルーン制作

３　実施後の評価

モデル事業実施後には、事業者及び参加者各々において別添「評価シート」に基づき評価を実施した。

⑴　参加者の評価のポイント

・（職場での）挨拶や相談、日常生活での人との会話など、対人関係が改善した。
・働くことへの意識の変化や進路について考えるきっかけとなった。
・モデル事業の参加は、同様に働きづらさを抱える人にとって、よい機会となり得る。
・2 か月の就労期間は、負担が少なく参加しやすい。

⑵　事業者の評価のポイント

・回を重ねると、コミュニケーションが円滑になったり、自発的に取り組んだりする様子が見られた。
・本人の様子・ペースを見ながら、徐々に互いの理解を深めていった。
・事務局の伴走は心強かった。
・2 か月の就労期間は、（本人の）次のステップを考慮すると短いと感じるが、本人の状況や進路の希望による。
・モデル事業は、仕事の切り出し事業者側の労働力確保策にはならないが、職場の雰囲気に変化が見られた。

※なお、モデル事業の参加候補者として相談員から声掛けをした 5 名のうち、2 名は、不安感の強さから就労には至らなかった。うち１名は、この体験を通して相談員との関係性が深まり、結果的に福祉サービス利用につながった。

⑷　モデル事業参加事業者及び事務局との振り返り

ア　開催日　令和７年１月１０日（金）

イ　主な内容

【感想・気づき・意見等】

・働きづらさを抱えていることが一見して分からず、問題なく働けた。
・労働力不足、というよりも社会貢献のひとつの方法として参加事業者を募る方法がある。
・事務局の伴走支援があり、困りごとをすぐに相談でき安心して参加できた。

【課題・懸念】

・「雇用」だと、リスクと感じる事業者もいると考えられるため、有償・無償ボランティア、就労体験などの形態もあるとよい。
・参加者の個人的な背景等について事前に情報提供がなく、不安に感じた。
・規模が小さい仕事のため、限られた仕事しかないため、次のステップをどのようになるのか、懸念する。もう少し大きな規模の事業所いろんな仕事が選択できるとよいのでは。

【事務局の考察】

・不要なバイアスをかけないこと等を理由に、事業者には、本人から聞き取った配慮してほしいことのみを伝えた。事業所側では不安があったようだが、素性や背景とかを知られたくない中でも受け入れて欲しいというニーズもある。また、本人の自己決定を尊重することも重要である。

・モデル事業者の丁寧で温かい対応により、本人達の心身の変化が見られた。社会経験が圧倒的に少ない方の経験と社会参加のきっかけづくりには大きな効果があると考えられる。

・事業者側への研修や仕事の切り出し方のフォローが必要である。

・参加者と事業者のマッチング後の、本人・事業者双方の心情の変動に寄り添うことも重要である。

・モデル事業が終了後も、本人及び事業者の関係性が続いており、彼らにとって新たな居場所や相談先ができたことがよかった。

4　検討課題と今後の方向性

モデル事業を踏まえ課題と今後の方向性を以下のとおり整理する。

⑴　参加事業者の拡大

継続的かつ長期的に働きづらさを抱える人の支援を行うため、市内及び近隣自治体の事業者に、このプロジェクトに参加いただくことが不可欠である。しかし、本市には小・中規模のサービス業が多く、労働力不足の課題認識が薄く、また、働きづらさを抱える人は障害者手帳を持っているとは限らず、障害者雇用につながらないため、参加の動機付けが弱い。社会的意義を伝え、協力をお願いしていく。

⑵　事業者及び事務局との連携・協働体制

事前の本人情報（障がい、生い立ち、特性等）の提供については、事業者と事務局との間では、立場の違いでその考えに違いがあるが、事業者の不安や困りごとに対して、事務局が伴走的な支援体制を整備することと合わせて、研修の実施等により、心理的負担を軽減に努める

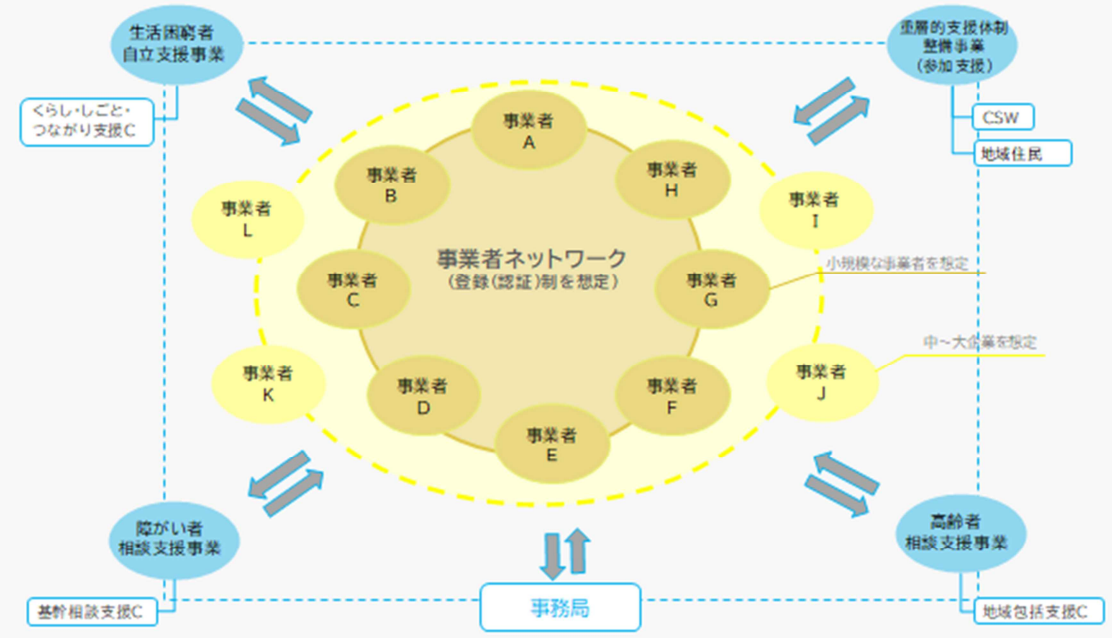
⑶　働きづらさの課題についての周知

令和６年度モデル事業の結果を市民に周知し、働きづらさの課題について社会的に理解・共感を広げる一歩とする。社会に発信することにより、働きづらさを抱える人が声をあげやすくなり、潜在的な支援ニーズの把握につながると考える。

⑷　事業者が中心となったプラットフォームの整備

事業者同士が、情報やノウハウの共有、事業者の掘り起こし、地域への啓発などを担うプラットフォーム（図２）を整備することにより、相談支援機関が、相談者と企業を個別にマッチングする方法より、働きづらさを抱える人の多様なニーズへの対応、支援の継続性・発展性が期待できる。

（図２）事業者を中心としたプラットフォームのイメージ



⑸　地域の活性化・経済循環の視点

働きづらさを抱える人が身近な地域で働ける社会をつくることは、地域経済の循環を健全にしていく側面も持つと考えられる。地域内での消費・雇用が循環することは、人材・経済的な資源を厚くし、社会保障費の抑制にもつながる。さらに、顔の見える関係性をもとに支えあう地域共生の視点からも、本プロジェクトの参加事業者は、地域に根ざして事業を行う小・中規模程度が好ましいと考える。一方で、前述のとおり、事業者側に労働力不足の認識は低く、参加事業者の拡大が課題となる。

5　重層的支援体制整備事業（参加支援）としての位置づけ

働きづらさを抱える人は、前述のとおり、障がいや病気だけではなく、人間関係への不安、過去の不登校や失敗体験等、様々な理由により社会参加へのハードルがあります。障害者手帳がない、生活保護対象でもない、（福祉的な）就労支援事業も希望しない・なじまない等、制度の狭間で支援を受けづらい人に対し、社会とのつながりを地域の事業者と一緒に支える仕組みづくりを目指す本プロジェクトは、まさに重層的支援体制整備事業の参加支援事業と言えます。対象者の年齢、属性が多様であり、福祉の枠組みを超えた仕組みが必要であるため、障がい福祉部門（福祉課）だけではなく地域づくり部門（地域共生推進課）と協働して進める。なお、先には、特に高齢福祉部門（長寿課）、生活困窮者支援部門（福祉課）、教育委員会とも連携も見据えている。

地域のみなさまへ

働きづらさを抱える人々が、「働く」ことを通して幸せを実感でき、また、より多くの人が身近な場所で働き活躍できる持続可能な地域をともにつくりませんか。市及び福祉の専門家が、働きづらさを抱える人が能力を活かして働くための環境づくりを一緒に考え、フォローします。

本事業の趣旨に賛同し協働いただけるみなさまからのご連絡をお待ちしています。

発行：令和7年4月
発行者：長久手市障がい者自立支援協議会

就労支援モデル開発プロジェクトチーム事務局
長久手市役所福祉課・地域共生推進課
長久手市社会福祉協議会・長久手市障がい者基幹相談支援センター

問合せ

TEL 0561-56-0614　FAX 0561-63-2940
メール　fukushi@nagakute.aichi.jp

協力：金城学院大学人間科学部コミュニティ福祉学科　　准教授　橋川 健祐
令和6年度モデル事業協力事業者：（合同）AYAKA ASSOCIATION まちの台所「風と虹」、（一社）長久手アグサポ倶楽部、（株）トビラmemene balloon

「働く」を通して一歩を踏み出しやすいまちづくり。

働きづらさを抱える長久手市民の数
125人に1人

長久手市民
約61,380人
（R7.4.1）

ひきこもり状態の人
約820人

働きづらさを抱える人
約490人

国の調査によると、心身の不調のほかに、就職活動でのつまづき、退職、職場になじめなかったことを、ひきこもり状態になったことの主な理由として挙げている人が少なくありません。（※1）

就労の困難さが、ひきこもり、二次障がい（※2）の発生、長期的には生活困窮・社会的孤立などにつながる恐れがあるにも関わらず、働きづらさを抱える人が、一歩踏み出す際の選択肢は十分ではありません。また、悩んでいても相談することは非常にハードルが高く、支援機関が把握することが困難です。

そこで、長久手市では、既存の相談窓口や支援制度とは異なる、多様な働きづらさを抱える人の就労を支える新たな仕組みが必要であると考えました。

※1　こども・若者の意識と生活に関する調査（令和4年度）による。
※2　もともと持っている発達障がいや身体障がいなどの一次障がいが原因で、後天的に生じる精神的・身体的な問題のこと。

○全国で、15～64歳の年齢層の2%余りにあたる146万人が、ひきこもり状態であると推計
～こども・若者の意識と生活に関する調査（令和4年度）／令和5年3月内閣府

○ひきこもり状態にある人の約6割は「働きたい」と思っている　～ひきこもり白書2021

「一歩」のきっかけを支えたみなさん

働きづらさを抱える人が、身近な場所で短時間、短期間から働いてみることを通して社会参加のきっかけをつくることを目的とした就労支援モデル開発プロジェクトを立ち上げ、令和６年度に3名が市内の協力事業者で働き、一歩を踏み出しました。将来的には、事業者と行政と協働による就労支援プラットフォームをつくり、働きづらさを抱える人が多様に働ける社会に向けて取組を進めます。

「一歩」を踏み出したみなさん

（合同）AYAKA ASSOCIATION　まちの台所「風と虹」／飲食業

人とよく話せるようになり次のチャレンジへ！

関根さん・田中さん

彼が、デザート作りが得意であることを知り、お店でシュークリームを作るイベントを実施しました。普段は１人で作っているけど、多くの人と一緒につくる楽しさを体感してもらえました。

心がけたこと

本人のペースに合わせて、話をし、お互いの理解を深めていきました。話をする中で、仕事の量や内容も工夫していきました。

働いた Kさんより

新しいことにチャレンジするときには、毎回嫌じゃないか聞いてくれて、安心して働くことができ、人とよく話せるようになりました。バイトの面接が苦手だったので、事前に自分のことを知っている場所で働くことができたこともよかったです。バイトへのハードルも下がりました。

（一社）長久手アグサポ倶楽部／農業

自分に合った仕事に出会えました

成瀬さん

Tさんが作業途中にスマートフォンで田園風景の写真を撮っていたのが印象的でした。働く場所として新鮮だったのだろうと思います。

心がけたこと

体調面で無理しないようにすることと、作業がうまくできなくても気にすることがないように、少しずつ、ゆっくりと進めました。次に向けた一歩になれればいいな、という気持ちで接しました。

働いた Tさんより

体を動かす仕事は自分に合っているようで、農業をもっとやってみたいという気持ちになり、自宅でも、プランターで野菜づくりに挑戦しています。一緒に働く人が「恐くないから大丈夫」と思えるようになってからは楽しめました。ステップアップに向け、この体験はとても効果的だと思います。

（株）トビラmemene balloon／バルーン制作

もっと働けるかも、と自信につながりました

長崎さん

とても手先が器用な方でした。バルーン制作もどんどんコツをつかみ、プレゼント用のバルーンのデザインを一緒に考え、サンプルづくりから制作まで取り組んでいただきました。

心がけたこと

はじめは、とても緊張した様子でしたが、雑談をすることで徐々にほぐれていきました。とても真面目で、仕事もどんどん覚えてくださいました。

働いた Nさんより

はじめは1週間に1時間でも体力的に厳しいと思いましたが、実際は短く感じ、もう少し長く働くことができるかもと感じました。まずは働いてみて、その先の働き方を考え、選択できることがよいと思います。市役所の方などのフォローもあり安心して働くことができました。

３名と事業者のみなさんは、今でも関わりが続いています！